



風邪



川崎ゆきお

「風邪ですか」

「ああ、寝込むほどのことではないが、寝ておった」

妖怪博士は布団から起き上がり、いつもの座敷でいつもの編集者と話している。

「流行始めてますよ」

「そうか」

「一日の平均気温が十度以下が一週間ほど続き、湿度が六十%以下になると、患者が増えるようですよ。ですから冬の初めに増えるようです」

「寒くなり、乾燥すれば増えるのじゃな」

「でも、風邪の邪って、いい感じですねえ」

「邪悪の邪だ。風の邪だ」

「風邪の妖怪はいませんか」

「だから、風の妖怪が、風邪じゃ。そのままじゃないか」

「風邪はリアルですから、そこまでリアルだと、妖怪の入り込む隙間はありませんねえ」

「そうじゃな、作り事をする必要がない」

「でも、邪悪な風なんですから、これは悪い妖怪ですねえ」

「天邪鬼のように、ひねくれた趣があればいいのじゃが、風邪はダイレクトすぎる」

「邪心なんかはどうですか」

「心に鬼を持っておるんじゃろうなあ。鬼の所為にする。魔が差すも、魔の所為にする。自分のことなのにな」

「でも、邪心や邪推などは、よくありますよ」

「うむ、悪しきことを考える。これはまあ、仕方がない」

「悪知恵もそうですねえ」

「邪魔も、凄い字面じゃないか」

「お邪魔しますの、邪魔ですねえ」

「邪魔臭いもあるのう」

「漢字で見ると、不気味です」

「よこしまな、悪しき心かもしれん」

「普通に使ってますねえ」

「まあ、そういう言葉があるのだから、よくあることなのだろう」

「妖怪は、どのあたりのポジションでしょうか」

「あまりリアルで、現実的なことじゃなく、どうでもいいような稚拙な事柄が多いかもしれんなあ。まあ、それは時代による。今の時代になるほど、可愛くなっていく。妖怪も進化していくのだろう。そして、もう妖怪のポジションがなくなりつつある」

「別のメディアに置き換えられるようなものですね」

「そうだなあ」

風邪で頭が冴えないのか、妖怪博士の想像の翼も羽ばたきにくいようだ。風邪症状が邪魔をしているのだろう。

「先生、今日はもう寝ていないと駄目なようですので、失礼します」

「帰るか」

「しんどそうです」

「うむ」

妖怪博士も人の子、普通に風邪を引くようだ。

了